近代治乱記　廿四

和書門 類
二〇六〇三 號
二五九 函
二一 架
二五 冊

内閣文庫
和書 類
二〇六〇三 號
二五 冊
二〇一 函
八 架

内閣文庫		
番號	和	20603
冊數	25	(24)
函號	201	97

国立公文書館
National Archives of Japan

天和三正九三ヨリ同四年二九二迄

淺草文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

天和三年正月廿二日

禁裏和歌御會始

檍葉久緑

御製

かはりなき色はときはに玉椿世々は常磐へと緑の松

関白冬経

玉椿たえぬ緑と八千年は行末とをく栄えかはらし

左大臣藤原基熙

影高も茂る玉椿葉のいく世いく世の色はかはらし

日本政府圖書
淺草文庫
和學講談所

右大臣兼熙

いくちとせたえぬ緑乃数そへて白玉椿ゆくへかきらん

式部卿幸仁親王

ちよふかき春乃色こそと玉椿みかくちしせれ陰ハかはらし

内大臣藤原公親

八千年乃春をかさぬへき玉椿葉ことの陰ハ春とをしく

正二位経光

八千年ハ春もかきらし玉椿葉毎に陰陰と春をちきりて

権大納言藤原兼房

つの葉そふ白玉椿春の代々ちきる八千世ハ春ハかきりせし

右近大将藤原定誠

かきりなき春の色をもかけてこそちきりし世々の玉椿かけ

権大納言藤原頼孝

玉椿いく八千年の春梅の葉ことの陰ハ春をかさぬへき

権大納言藤原經慶

つのこころ立そふ春乃八千年と白玉椿きみかき御代かな

権大納言藤原実通

玉椿八千世乃好の春梅もみとりとそへよ春をちきりて

権大納言藤原光雄

八千度ハ春のみとりも玉椿の色をかさねん御代乃行末

正二位藤原基福

いくちよもかはらぬ色の玉椿葉かへの数を君かちよにて

正三位藤原俊廣

あはさらは八百の椿数へてもつきぬ葉かへも千世の名そしるし

正三位源通茂

君そみむちよもかはらぬ山の玉椿立そふ色の見へき八千年の影

民部卿藤原方長

末とをく君かちきりて玉椿千年の陰を君そかそへし

権中納言藤原宗量

君か為ゆくよの数といやつきに葉かへぬ色の玉椿はも

権中納言藤原資廉

玉椿葉かへの枝の陰に移しみむ小松と千代のためしの色も

権中納言藤原淳季

移しうへて君そみるへき玉椿八千世をかけて枝の色はありとも

権中納言藤原淳房

君かへむ八千世の色は玉椿いつもかはらぬ名とそみえてまし

権中納言源通規

八千世へて君そみるへき玉椿このはる枝も色そかはらし

権中納言藤原公通

これ君の世々のためしや八千年へて君か絶せぬ椿かゝらん

権中納言藤原兼基

八千年は君とちきりぬ玉椿老せぬ色の友となるらし

権中納言藤原実輔

めくみある君かみことの玉椿いく世の春はちよのへぬらん

権中納言藤原家教

うつし植しことくは椿君か代の八千世をこめし契りなるらし

正三位平時量

さらにまた御代の久しきためしとて御は椿も色ときはなく

従二位藤原氏信

うつろはぬ八かの椿ちよよりも猶色はみるへかりけらし

従二位藤原定淳

はえせしか日玉椿ひとつ葉にこそ君か八千世の栄へ八

式部大輔藤原豊長

百敷や玉はみきりの玉椿八千世はことに君そかさし

参議右近衛権中将源有維

ふるのみとりの色もかはらて玉椿君か八千世は春ゝにそへん

右京権大夫藤原隆豊

葉ことに八千世の始も玉椿君か栄えも松陰にちきりて

大蔵卿平時成

君か代と日玉椿露なかく千年はもろもろ千とせとちりて

参議右近衛権中将藤原基量

十かへりの松もとよりし玉椿かはらぬ影は八千年のはる

参議右近衛権中将藤原実業

君そみん八千世の椿その葉にはへもあらし玉の光めくみも

参議右近衛権中将源重條

玉椿葉かへぬ色のちきりとこそ君か八千世の光ゆくすゑ

参議右近衛権中将藤原隆真

八千年は色とちきりて君か為みとりかさなる玉つはきかも

従二位藤原実陳

さて又君をかそへん玉椿代の葉にちきる八千年のはるか

従二位藤原実種

代の葉にとみつきは君乃玉椿千世をやへしも君とたのまり

正三位源通福

玉椿君か八千世乃春はまたとみつくみんもくるとしの世

正三位藤原実富

君そみんはるかくつきせぬ代の葉にかはらぬ八千世は初春にして

正三位源雅豊

幾代の影みるはるかし松もわれもちとせ玉椿ゆるよあらかこのも

右衛門督藤原季保

玉椿代の末はみえうこの春と君か八千世乃初しあらして

従三位藤原定光

玉椿八千世をつもる君か代はかはらぬへよ春はみえけり

従三位源通音

玉椿あらしみよりそ八千年は春もかさねし宿やさかえん

大外記清原宣幸

春ことにみとりそへて玉椿葉かへぬ宿や八千世へぬらん

左近衛権中将藤原隆慶

君か代の千年はためし玉椿ときはかきはの色もかはらく

左近衛権中将藤原英通

ことの葉の色白玉椿いく千世もかゝ世迄かし君そかさへれ

弾正大弼源惟庸

玉椿あかしみとりに八千年は春をやちよと君そ待つらん

右近衛権中将藤原公起

十かへりの松は花さくのちもなほ八千世の椿なほ八かへりし

左近衛権中将藤原兼豊

玉椿葉こそへぬ宿のかすきいつの春は八千世のためしのへつくらし

左近衛権中将藤原為茂

みとりそふ白玉椿君か代にいく八千年はその色もかはらし

右近衛権中将藤原定経

ことしより皆ひらしあの年かさへていつの末の椿いく千世の春

前左近衛権中将藤原為親

君そへむ玉椿八千年もかきりしらぬは春の光そと

民部大輔藤原共方

八千年は春いくかへりあまつ代に玉椿かけてしらん

少納言平時方

色かはらぬ松の千年は八千代もあかれし玉椿春をちきりせし

少納言平行豊

みのとくりし世は千とせ八の玉椿葉かへぬ色も君か為とや

左近衛佐藤原康緒

八千年は春もみとりの玉椿たちならしく庭にも陰をならへん

うゑそめしみとりの椿八千年も葉かへぬ色と君そまもらん

右近衛権中将藤原為経

左近衛権中将藤原雅豊

八千年も君の御代のためしとそみとりあり世の玉椿かも

右近衛権中将藤原公晴

君そへん八千世の春は玉椿ひかしを露とそさかへみとりも

左近衛権中将藤原為緒

葉かへせぬ色を八千世の春緑に君かさかれん玉つくしをも

右兵衛佐藤原光忠

松かけてこれもよはひの玉椿八千世は陰は君かためしも

ときはなる色をかさねん玉椿みどりの色ぞ八千年の春

蔵人左中辨藤原光定

蔵人右中辨藤原俊方

君ぞ見ん大内山の玉椿葉かへぬ色のすゑぞひさしく

右近権少将藤原実陰

いつの春もくちせぬ八千世の玉椿

みどりはいつの葉末ぞひさしく

讀師　右大将

講師　篤親朝臣

發声　東園宰相中将

出題　雅豊朝臣

奉行　烏丸大納言

天和三年正月廿八日

新院御所和歌御會始

泉響滴春氷

あまたの世に春てふうらゝとも聴ものやはらかに流るゝ音も添ひして

貞九　八条殿

春きぬといはゐの井の清水の音立てゝむすひし氷とけそゆくらん

九太良　左露

うらゝかに氷とき出しとましる泉のあまりいはゐの水も春とつけなて

式部卿幸仁親王

暮てやゝうす氷れ井かゝいはもうすらも春をまつらん
権大納言藤原経慶

くみ世れ念いつきの春もいやましに氷とけゆく泂の春風
権大納言藤原光雄

せきいれしいつみに到く解氷見えしあしはこのまくるらん
権中納言藤原資茂

目にみゆく春に御池のひもとくと見えくこちら瀧の白浪
正三位平時量

世雨しる氷ふくく柳陰清き色春は風くかれく
従二位藤原定淳

氷るしいとねの清き春風にとけて春をまつも絶えなし
従二位藤原実種

岩もとなる氷もらへや春はくるくうす氷のこりなかれは見え
正三位藤原実篤

氷とけ春にふくるは花くるやかれいまに見えつらん
正三位源雅喬

氷るしみそのうち念とまちかねや春をいそねくとめくるらん
従三位藤原意光

春くる氷も見えくましにかれ岩ねもとのさそはれて
中務大輔源資賢

吹風に氷とけゆく春たちて春くわゝる山はしつくの

脩理権大夫藤原保春

春といへハ氷もとけぬ音たえていはねをとめておつる瀧津瀬

左近権中将藤原隆慶

朝日さす春ともみえぬ松陰のいは井は清き氷なりけり

右近権中将藤原定経

春来ぬと氷もとくる谷川ハ春風よりそなかれゆく山下水

左近権少将藤原定勝

うちとくる氷ハかはの初花とみえて岩間にひらけゆくなり

少納言平時方

春たちて日比ハ氷もとけぬらんいはまのみきハ流れそふらむ

少納言平行豊

風かよふいはねの声もきく春のなにかは氷とかけていつらんハ

春月

平松前中納言

天和三年二月廿二日

水無瀬社御法楽御当座三十首

薄暮霞　御製

外山とくくれてゆく名は色もかすみはてしをちかた山のは

柳帯露　幸仁親王

ときしあくはかなき露は玉かゝる柳の髪を風もこゝろとかな

帰雁　兼熈

花ちるをさそやこの春とゝまらてかへるさ心もとしらぬ雁の一つら

春雨晴　一　基熙

春雨はふらなんハ志ばしはれつゝ見よともえて露かゝりて

春月　同

柳にも露けきこまかに春の月影ほのかにやかすむ夜もも

晩花　重光

とく露は夕日さへもかけ遠くに花は露の春は晩

水辺蛙　公綱

せきいれし苗代水もぬるみてや小田の蛙はなきまさるらん

郭公　光雄

嶺ちかくて聞はいまだし待夜の声をまたき山村雨の空

夏草　経慶

分ゆかん道はしげりまさるとも白露のひるまも涼しき野への夏草

深山泉　方長

山ふかみ岩もる水の末よりて結ぶてまでも袖も涼しき

七夕夜　公起

恨みとや立つなみならん七夕はあまの衣手かへる夜の空

籬下萩　行豊

露おもみしほる萩も移ろはん梅風に結びかくる萩は立つる

草花　淳房

世は夢も今ことさらへん名くの花は色もとく草は籬に

虫恨　　　　　　惟庸

これさけしうきねくれて虫やなくあはれならて秋の恨を

庭萩　　　　　　季保

萩さけな誰とひみんこよひくれ枕くさのうきたとへの秋萩

夕虫　　　　　　定経

いつもりてんなれもなく夕月の山のはをそくかくなくもなし

杜落葉　　　　　附量

いはしめて時雨ハもりの下の落葉ゆくとさなしものこしてへん

地附翁　　　　　資茂

錦せへる雲やはかしまたよ山のはをよ目ハてりかへるかへるハ時雨く

千鳥　　　　　　附成

とまりの芦の関守浦千鳥こゑにまよふて浪の枕に

雪中友　　　　　通茂

雪の風もやけそあはれさりしかれ世の常をいれとの東山く

西恋　　　　　　為綱

まちわひしなりひとつ何よきゝつのかけより露の下のつらしハ

末逢恋　　　　　経光

津の国の難波によく年の恨もとゝもあはんとていつのさかひ

後逢恋　　　　　附方

いくひみの恨をとをさへしつの中に心あやなく後もまちかね

忘恋　実陳

思ひしれわれは身をうき涙川たえて中川も逢瀬とそなる

契別恋　基福

かはしつることはのすゑをたのむとの有明の月に袖もつれなき

稀恋　御製

こひしさはとてもつらき人のこゝろにも立よるへくもなきやいかにせん

恨身恋　兼豊

うかりける人はこゝろのつれなきを恨もせしと思ふ川のよとみ

松風　実輔

入あひの鐘のひゝきも数たえてたゝよそへのこの頃松の嵐かな

旅思郷　実業

ゆくていつれはやこしきはいさしらぬ宮この山のかたの雲

神社　雅豊

みしめなは千年をかけて君か代は
ゆくすゑかくいはゝ神つき

出題

奉行

天和二年二月廿五日

聖廟御法楽五十首和歌

春

海路霞　幸仁親王

こよいくしみなしやいつこか行舟かし八百霞は八重乃塩路よ

竹林鶯　御製

春もはやなくある竹林の中にも初鶯は声まちかくしつゝ

島中花落葉　方長

いつくにかうつろはましまるへしてあるとしへよるへは星人

窓前梅　為縁

ことゝふも人はなき宿はたゞ春の朧月夜の窓の梅かゝ

河岸柳　為敦

あさみどりなびく河岸の浪にうつれる青柳の糸

山路桜　実久

夕日影うつろふ色もしらくもにたゝるは山路の桜狩りてきたらむ

雨中春雨　経慶

ともしらぬ人のこゝろも春雨のふるとも見えぬ軒のしつくに

関路帰雁　隆志

関の戸のあくるもまたで雲井路をかへる雁がねのこゑぞ人の合

瀧下款冬　光雄

あらき川玉ちる浪は岩のねにさかれもせて咲山吹は花

池辺藤花　季保

うつりゆく影をもなれや池水にみなそこかゝる松の藤なみ

夏

雲間郭公　隆慶

まち出る雲のたえまをもりかねて名のりかけたる声の一こゑ

門田早苗　公紀

あすこそは門田のおもてうちしめりみるや早苗の露も涼しき

[illegible]　兼豊

秋おもひそれまかりして今よりそ秋かせ漆はやまの比

毎夜鵜川　惟庸

きよせ川ともしかゝりも涼はなへて鵜舟のかゝりてよるそしらん

樹陰納涼　為経

暮かけてたちよるてもみしせ顔のあふきの下風にあつさ忘れて

池上蓮　雅光

夕風にうちなひくも涼しき池の汀よりうかふ蓮はそよけても

林間蝉　定経

しはしあき林の蝉のなく声もこの梢風に吹く涼しさ

秋

泉邊初秋　兼継

庭さよ秋庭は清水のなかれくるかく涼しき秋はきにけり

池邊薄　俊方

今よりは池のはゆきしは見えてはよも尾花の袖にまねくる

籬露萩　雅尚

うき旅の下露は袖もあはれなれ

嶺上鹿　淳房

月影もつゆまたきにやはりてあはれしるやなきしられ

杜間紅葉　行方

立よる杜の紅葉はなかきをやとりて外の雲はみえては紅葉

田家雨　　氏信

かくれても住居かくしぬとも山里にかくしたかひく烟は絶ぬ夕雨

鴨遊池　　通茂

ゆかてはよせつる身を杉やも鴨池は鴨かくれなく

十三夜月　　言光

こよひなほあふ名にしあふ人ぞなき月は見てハ志らぬ世を月は新

千鳥過葉　　実輔

岩こへせしなみの年をともなく只くれは流水の岩はかられハ

寒夜擣衣　　有維

たつ里も寝ぬ夜は寒きよはたえて山本里ゆくらん衣うつ

冬

橋上落葉　　時量

まさしちりしく紅葉踏分てさわたるハ山のしまへの板橋

鳥聲霜　　雅豊

朝なく霜をかさなく人かはへれ羽ぬれて袖をはらはぬさ

園上雪　　基量

色くしみな草もしたきた暁こそやのひまもなを雪は光ハ

松上雪　　定業

これも又一本はかりあまりたまつ松のやかく分雪はふらぬ

暁天千鳥　　宗條

あつき日は泉の声もとやさしかけし宮木のかけそ涼しかるらむ

月前神楽　通躬

糸竹の声もさえみわたる雲の上の月に更行胡琴の声

深山炭竈　兼連

きゝしにも志らるゝれもやまとしかすみ竈より山は雲るらん

恋

浅恋　射嫌

思ひのねそみちしそ袖さへぬれて中々つゝみかくしもゆる哉

人伝恋　隆豊

ありしよハ津とよりとこそ頼めしか今ハ人つてにたにかれし

憑媒恋　公起

あまをふねゆくへもしらてたのむともあはせはやらむ中川の水

詞和不逢恋　実種

おもひとも人の言の葉ハ井よりけてあまた袖月日のなかきさせんとハ

昔偽恋　資誠

まことあるものといひてし偽のはてとりうてつらきをも

契久恋　兼通

行末の年月まてとちきりしもつれなくて経る年は年

後朝恋　定経

わかれきてあかぬ袖おしむ今朝ハなほありしにまさる袖のなみたかな

来更恋　　　俊應

かゝるなよ猶ひとの柴乃とぼそにそへて世をしのふ乃いほりへこそ

雑

谷風　　　行豊

野風の谷ふきあれて吹はらふ雲ハあなたへと今日乃月やはらけし

嶺雲　　　実家

晴ゆくや今日のみ花の絶まよりもとの山峰の白雲

洲鶴　　　実陳

よさむにもこゝろ寄るかや思ひわびてわかれて川辺の霜に鶴なく

梢猿　　　基恒

さびしくも時雨の椎柴猿ぞなくこのこゝろ我もさそはや

神社　　　豊長

あふぎみん小野乃春に咲梅の名香ハ世に神風とともに

山寺　　　通音

はつしくれきくやさびしきこもりえて尾上の寺の入相の鐘

稲舟　　　宗量

以つころいそぎてかりしこよひつまてもるのかくらむのまれな稲舟

寄松祝

末の代乃春まてつゞくひとすぢよそなる
松もみどりのかげをそへつゝ

天和三年三月七日

禁裏和歌御當座御會

霞春衣　兼與

さほ姫の霞の衣春きてはおりもはへけきたちやかさねん

山家鶯　玄記

山かけの春はねも鶯のはつねもまたてすこしへる覧

春曉月　雅元

鐘は春の明ほのとつくる空くらはに東山の月は影そかすめる

梅薹之風　附成

ひましめく窓吹かへしみぞれらの白雪梅は也風

老葉経　光雄

もてきて文みれとハ之しもつの葉はまそつつるかへかみそく

花満山　通蔵

一村はみとりやうもとのよ伊勢のまた花咲く川山あまりかく山

古寺友　雅豊

家庭立　実蕗

もすかめやえし梅そ〇れの傍とつの〇山〇〇〇文書か〇ハ

家鏡立　為綏

もゆそかくよそよや津のまて山為は〇山あれかく〇〇〇のをえんて

家榜立　御製

作て給夕もとを秘今うんしつ〇れとち此津〇たかりす

家車立　実業

かりひそひ行治もさて地と車ひうしやうかとつかくれん

家華立　雅喬

隣里鶴　基福

さ川うかる〇〇かくこけハ常〇〇ハ家〇ちつきも為はをく

旅泊夢　　定経

松かねの夢も結はぬ枕にハ浪くハ濡れらまし袖もゆくすかれん

独述懐　　資慶

めくみある春につゝえてとろかされ
人かすならぬ身とやいとはむ

天和三年三月十六日

石清水八幡宮御法楽五十首和歌

立春　　御製

あらたまの年いくよれをかきりなき御代のゆくすゑ春は立らん

江霞　　冬経

夕まくれのとこゝへたてゝ浦なみのふかきまつれ地なるハ江の霞

旧巣鶯　　弘資

鳴そむる声は春をよそなる枕古巣なからや鶯のなく

深夜梅　俊恵

見れぬや月ハふけゆきても霞くも白うしてそ梅乃にほひの色と

柳辨春　通規

あさみとりみとりもそひて青柳ハ春乃日数を見えぬなりけり

庭下　有維

ちる花乃春ハやいとく咲花ハ山もとかくそこゝ色とめかね

栽花　兼世

栽くみん宿ハいつれも千年ふるまてへて春ハ宿にさかし庭

盛花　豊方

あかくよれ春のかくさす八幡山すれも咲しる宿の色のみをし

花浮水　実陳

氷も春ものとけき花の下流に流もとゝむる春乃山川

遅日　附量

山のはくかへ家路もまた暮も花に心ひくせはり此日も

御陪　実種

みるまゝに流れの井に深きときハ山にも猶のこし咲もかはして

三月尽　貞廬

なかなかに打出山かくれゆく春霞ハらも猶てくる春かな

新樹　新院御製

とりとりに花のこりても思ひつのみそらとくこゑもみえける

名所

郭公　公親
今はとやへ鳴つる時そと聞てしらぬ山路にかへるもなしまた

早苗　経慶
穂に出ぬ苗代の小田ハつゝかへの葉末は露やみたるらし

水鶏　保季
菱乃葉の浮ハひらく窓をたゝくや杉の戸たゝく水鶏なくらし

蛍　誠光
夕風も松にふきて陰るゝところの蛍は夜の涼しさ

納涼月　通躬
風寒み岩根の松に下まくら何そ水の月は涼しけれ

夕立　時慶
かきくもり峰をかくし見えしは山本の雲ゆく風に涼しき夕立

初秋露　基熙
白露のおきそふけさとしら露に萩の上の風よりさきに露やおく

東萩　光雄
吹移ふ萩は上葉の露の風にかつこほるゝもとさきハとかめし

胡萩　通福
おりとらハちりなんもおし胡萩は玉ぬきみたれまたて末

槿花　兼豊
とく見しも去ぬるきのふ葉は槿の日影とこそにほふ涼しさ

閑庭　英通

家居せし門田は西の山ぎはに書をよむ庭は夜をかくしつゝ

木間月　方長

影よ生ふ山おろしもなくてもりくる木の間の月の光をしかり

舟上月　為哉

白川に舟をとめて家は舟のうへにゆくもあかの秋の月の影

擣衣幽　雅元

起きしよ夜もすがらうつ衣かさねにけふる音

松虫　雅永

鳴は暮て家村にも声さそふらん人もまつ山はなく

稲田　通庵

これや此の秋の音も身にしみて稲葉をわたく縁のと山田

見蛍　家量

縁りはいかゝ中にともしびの光つきそみるらくそめれ

落葉　幸仁親王

こゝろかれやちりしこれ葉の色にて身にしむ身の

氷不解　資蔵

山川のおもれもあへてこゞるせくの川より氷し風はしかくて

初雪多　淳房

ひとれぬつるみ世にこそ見つき池にて山を移してかよふとも

神楽　季縁
たえことまもやしろのまへにつゝみうちとめく神もうくらん
旅霰　実業
岩かねを宿かりて袖のかはくも旅山風にちる玉あられかな
述懐　為猶
かくしても雲にかくれしいこま山いつかあふみの秋葉はしる
寄欲舊　惟庸
いにしへの花よりさきのあきに又こひきもちりもせし
忍恋　雅喬
あまりはいまはしられぬ袖のみなれともいつはけふもやらん

不逢恋　実輔
あひみてはのちのいのちをしらねとも契りしはてのなかくもはし
祈恋　公起
逢までといのるいのちをいのるみしめのうちに神のまもりを神にまかせて
契恋　附方
かきくらし世には契りてとはれしや頼みし年もえてそ恨みぬ
被厭恋　季條
あふ事まれにたれしいつもかよひつゝかれかへ露のきえはてぬかの
絶恋　実蔭
たえはてしいつそなみたも絶えはてて袖のみあらしよせくるひかりても

名所松　基福

生そふも老もつゝく世を男山神かきて松もちきりは八千とせまて

樵路　氏信

かへる人もかりくらしけれや樵路はたえて樵夫そ山風に帰く

山家隣　行豊

よしあしのよそにかはしかつとくもうへさしかけし隣とはよそへ隔く

庭苔　具続

さかふかき婦る表てあて庭かの苔かみそとも名をそ也ひけり

述懐　隆豊

あとこし山ちのゆく末て猿かけしとこえともかしかしとそなれ

社頭祝　通誠

八幡山君かこゝの治まれる代とも
末長かれとやうこきまもらん

勅題

奉行

日野中納言資茂

天和三年三月廿一日

新院御所月次御會

款冬露　新院御製

山吹ハ今そさかりの玉の枝おなしことにおく露の光そそ

胡海路

漕出れこの世はなれのこゝちして浪ふくふねの湖月の光の船

貞九

夕暮はまつのきハ山もと雲もなきは旅ゆく舟ハゆらゆらとゆる

朝まだきみかはに出てゆく舟ならもかくこそ人を思ひ渡る

右大臣藤原基忠

霧はれぬこ小萩かりても風を待ちて見ゆる八重に山吹
と鳴のおもかけなかなかし瀬々と出つれて行ほとさえかりし夜な舟

式部卿仁親王

ちかしれぬさけたちや山吹のえもいひし霞の夕まくれ
とまり舟一夜は都とみかしいかにと鳴くさこそよりつれ行

權大納言藤原光雅

梅さくひまに霞の岩間にもなかれし八重の山吹の
行舟のとま漕ぬ漆も見るは宇治路を流るゝ鶴の月の影

正三位源通親

山吹の花さくころ見もいせよ横風にたへぬ露もこほれ
うつ浪せしよ河のとまりも島陰舟の鳥は水底の江

權中納言藤原資実

見てせつもりて潮にこほれも又いくたひやとやの山吹の霧
かつら河れやわたりて瀬の鳥風にひきてかりて見ても河舟路は

正三位平経盛

風みてかつのうきちる瀬はこほれもあまのとや庭の山吹の
とまり舟よ河のおちに風けさのきてこよひるとはあかしひかりけり

従二位藤原実種

冬籠りともなきやハうへん山吹の枝折ける春は出てのハ
浦風のふきはらふ錦とこそ出て咲きける岸の浪の綾折舟
正三位藤原実家
こほれても又やとく影はうつらねとも何れか山吹の花
錦かと見ても見えしこそ出て同しからくらうつの舟
従三位藤原家光
とく露も冬かりても見れ山吹の花とみの絶る玉川の岸
こそいつる波さへはかくしく漆舟この湖かすとおかしけり
中務大輔源資兼
咲てそくり冬も見かくるとて張ひそく籬はむかの山吹の花

和田は原のしかくれてく浦なくは舟漆といふるとも舟
修理権大夫藤原保季
籠て紅見はなるをも山吹の冬く出てやしこよ寄けさ
河もかしし浪き川にもかはる錦舟の漆こよいふる舟そつとこふ
左近衛権中将藤原隆慶
山吹の花はひらきとなほそえて籬こそとも咲かなる露の玉
海原やこれ錦かなさくこよ出てく寄川舟の浪てかりてこふ
右近衛権中将藤原定経
夕まくれとよとよ露も籬もまうさりこかれく白山吹の花
うち枕をかしみかりくらひまくらとていつる夕錦は紅舟

左兵衛佐左京完之綱

くみたやこやかすたて山の端に霞く之かゝ照家は離せ
あさかほの浪立川にかゝる漆江とて名礼とは知れていつまてか争

少納言平時方

へとまかへともよしやたえすはりし思ひかゝる八重山吹は家の上の家
とわさけ烽のさかえさかゝ文ことはかなりし漆れるも船しつれ

少納言平行豊

さかまた八重山吹乃枝とれてなともさかうへて宿に至ぬ
胡をかし出の枝八つのをかの浦とくもに見ゆかへ同し浪乃上葉

大膳大夫藤原忠義

山吹乃花はまつさきて露と霜とさかかりして春乃名残
胡まくらき無縁ちかきかゝる霞ひ月は新しき身の照る春は海原

天和三年四月廿二日

古今和歌集御傳授竟宴御會和歌

寄道祝言

御製

天地乃神代乃こゝろを傳へきて今も八雲の道ハたゝしき

新院御製

まもりこしこのひとつ和田の庭つせ海のふかき道つたへけれ

関白冬経

志きし海の道も津きせし万年也のつく末の御代に栄せて

左大臣基熙

しきしまのみちある御代はおりをえてなをてらすひかりのかけそうれしき

右大臣兼熙

あふきみるひかりもくもらぬ君か代はつきせぬ道のことの葉のはな

中務卿幸仁親王

ゆたかなる御代はさかへしことの葉の道はさらにもたえすなりなし

正二位藤原経光

うつりきて君そさかえん古しへ今もかはらぬ敷島の道

右近衛大将藤原定誠

いやつきにかはらぬのこれ君かまもるこの敷島の道は行末

権大納言藤原頼孝

我君はかしこきをおしへて敷島のみちはむかしのへたて世にあらなし

権大納言藤原経慶

末行すゑもよしつたへて世の中にしき古今はしきしまのみち

中納言藤原定通

うつりゆくときつの君の代々をたつね来て和歌の浦へきし敷島のみち

権大納言藤原光雄

雲ゐのはてしなき海てもあおきの人なき世は

権大納言藤原資廉

守れなほ光をそへん玉津島君のみちあるをよむ人かきり

民部卿藤原為家

おほなほひの天津神代のはしめよりたえすもしられ中まし ことの葉

正三位藤原隆資

かしこしなむかしへかへしひしりよの葉もしく道の[illegible]ひさしきの八

正三位藤原基福

津くへ[illegible]かさ[illegible]御代ハつくせしかきりもなし敷嶋の道

正二位藤原俊廣

世をおもふ心も八重のよ[illegible]道ふ[illegible]ことをまつ敷嶋の道

正二位源通誠

あふきみし御世まつ[illegible]世まつもつきせぬ敷嶋の道

正三位源有維

今まては世々の寄弁まつ人も世にしられぬことのはまては

権中納言藤原宗量

あふきみし御代いにしへ今も行末も絶えせぬ光としらし敷嶋の道

権中納言藤原資誠

敷嶋のみちある御代のゆくすゑはこの道にひらけ[illegible]とお中よ中をまもる人

権中納言藤原淳房

光も添もあれひろまとこゝろさへてあふきみるへき大和ことの葉

春宮権大夫藤原兼基

津くへき[illegible]し今ハ光もあらたに御代の久しきを敷嶋の道

中納言藤原実輔
ゆこの由し代〻ハ高砂も松のとたえしのことの葉ハ猶
正三位平時量
あまねしな広きめくみと敷島のみちある代〻の人ハ見るかまゝく
正二位藤原之淳
ことの葉の玉しき浦のみちハなほいやましにまさる御代〻ゆの人
大蔵卿藤原隆豊
たえひなや出雲八雲のそのまゝにつたへてあふくちはやまてしそ
参議左近権中将藤原基音
つまむせしかきりもつたへてかさねぬる世〻敷島のみちある代〻の人ハ
参議左近権中将藤原実業
行末はさらにもいはし代〻よしへとあふくるまさることの葉は猶
参議左近権中将源定條
あふきみる御恵のかくみも異なるく世〻まさるへし敷島のみちはこゝと
従二位藤原実陳
行末あらはしし葉は猶も御代〻の行くる口の代〻の敷島のみち
従二位藤原実種
世は人のことはせくといふふることの葉のあらはさらへとえらしめて
正三位源通福
うけつきて世〻にたえせぬことの葉は猶八雲并てゆやゆくの人

右兵衛督藤原季保

和歌の浦や浜のまさこに敷島の道はかはらし代々の数にも

従二位藤原言光

絶せしか行末もしらし代々に猶ちつく言の葉の道

弾正大弼源惟康

更にまたあらためて敷島の道はさかえハ代々につきせし

左近権中将藤原公起

これも世にきこえあまた敷島の道や中々しるもかはるの心のへや

左近権中将藤原兼豊

絶せしかまさに此のころ来るまし世に敷島の道のひのさかへハ

左近権中将藤原為家

つたへしる道ともしらし神代より世々につきせぬ大和言の葉

右近権中将藤原定経

今年より敷島の道をへて行末も心のへハ絶しことの葉の道

内蔵頭藤原持言

もろ人も心とよせて敷島の代々に敷島の道のへにさことの葉の道

右近権少将藤原誠光

敷島のみちは此心のまゝもろ人もこの道の代々に心そひふかくし

少納言平時長

聞えて心のへひ道をかけれる世のなをこゝろつくしの浦風

少納言平行豊

いくよろの御代のさかへもかさねてし言葉の玉も数添れ哉

神祇伯雅元王

此のためへきさえてもかきりなき君か代は津々天て絶せぬ数添の哉

左近権中将藤原為経

神風や吹つたへきかはとの大れ成ある御代々にすさ嫁しき

左近権中将藤原雅豊

家君代めくみとよもと数添の成にる御代と祝ふを嫁

左近権少将源通躬

行末も今日そ此の道継へきて世々に絶せぬ言の葉哉

左近権中将藤原為綱

いかしへ今出雲八重垣千世こめて君に津ふる成ぞかしこき

左衛門督藤原光忠

君か代はみつしく葉れ玉津嶋此の道のよしみちあはれし

蔵人中宮大進藤原俊方

君か代も成らかかつまて此の道行末いく葉れ末は絶せし

侍従源具統

万代も君く繋つかくしと思とそ此の道ゆくへきさかへも絶ぬ成

御製

新院御製

讀師　関白

講師　万里小路中納言

發声　東園宰相中将

臣下

讀師　左大臣

下讀師　庭田宰相中将

講師　雅豊朝臣

發声　同前

出題　雅豊朝臣

奉行　日野中納言

一四月十六日古今集御傳授被遊候

禁裡ゟ被進之　白銀千枚　御屏風一雙

一綿百把　二荷三種

從左大臣殿獻上黄金五十枚紗綾廿巻二荷三種

右之通　新院御所江被進之又候

禁裏　新院江家ゟ綿三十把　同女中方ゟ
銀子三十枚宛　一

一四月廿二日晴之御會始人数ハ上下五十人摂家親王
公家官名未第供奉之人くも式法也　五十
三首之内毎首　今上　新院御製日野
二位入道資廉卿者所労ニ付不参　同其之廿五日
退ゟ懐紙ヲ見所謂者以前御傳授之人数之内之
故出座無之事　主上御残多被
思召奉候也

一

天和三年閏五月十一日　一
新院御所月次二首和歌

夏
篠田杜　御製
あつくへといかて志けきの杜の風末むすはふ夏そしらぬ容也

恋
鳴海浦　負丸
縄乃かすみかけいハ蔓ひたく人まてみ浦分けつゝかくも哉

夏ゆくと志けきの杜乃下道も露しけくしてきしてくすしらぬ

同

いつくしむ神の浦にも浪よせてかくそ被れかゝりてまもるなかきよ　左大臣基熙

みとりやなほしけき住吉の杜の契るにも枝を千代の枝をたゝへて　同

うけつけて神にまもりのよはひをはるかなる住吉浦波[?]　式部卿幸仁親王

かけ行八百よしはあらしまた白妙の波に住吉の浦の下草[?]　同

むかしより神にまもりのことわりて[?]見るめはかりて[?]波寸[?]　権大納言藤原経慶

うたくの露もかゝりもとはゐて住吉の杜の木陰涼しき　同

人ことにまもる神も住吉浦波は見るめのひかりて立へたゝぬ[?]　権大納言藤原光雄

緑よりも緑の下葉露も住吉の松の葉枝は常に　同

ちはやふる神まつる行年まてもはるかにことやはなき　正二位源通誠

露しもをちかひやかはらぬ枝松にて藤田神の住吉[?]　同

こぬまけ人はかりこそ浦浪にうらしやよるへもかはらて舟

権中納言藤原資教

帆あけしかの浦の松の風に寄もなくはてるやと枝にかゝらむ

同

こゝろまてもえたるかしかきせこりこ鶴やなれる浦の鵜舟

正二位平時量

ちとせの蝉なきゝえしなる鳥は志のゝの杜の木陰かくして

同

うしや鵜のあるかとうつゝかけにそれ鷺なるは浦としはしとハ

従三位藤原宣淳

夏ふかき志のゝの森の

同

一

志の葉もやとなるかけは寒しみえは夕まの松舟しられまいると

従二位藤原実種

立よらは木陰涼しくいつくなる志のゝの杜まとひ行かれて

同

ゆふくれは人はかはさきゝかなきしは浦の塩のみちひく

正三位藤原実富

夕立のなこりとしはし梢には志のゝの杜の下露

同

途りハなるゝなつさのうらに立れけりきゆき年なれと仲まくらくく
一條三位藤原定光
今朝ハ藤田は露の千枝乃給ちるとも露もともにくるれて
同
浪乃かけ袖のうらによせてや八雲かしてハおつとあかき
中務少輔源資氏
あかしハなつきこゆれてゆくまとのかれあさ林浦乃拾舟
同
あつさ日のとくるとへて夕涼ミ成て立花さの露ふれ来めくれ
攝津守藤原保春

立かしき花さの雲を出て立すの下陰を佛まくしき
同
あかすハ松くなつきの浦なるをいまの拾舟にこのれてそゆく
左近中将藤原隆慶
夕立乃かきて涼しく雲ちりて立けなき花さの雲乃下草
同
あつさころもおしくれぬ人々ともくなりてのうくさくく
右近中将藤原定澄
夕く塀乃色も涼しき夕乃かれちの地花さの杜の下露
同

おもひをよゆく末のかしこの紫もよそへてかゝるゆかりみせんとは

なく蝉もまさき緑とやいはくらん森乃杜の露のしく

少納言平時方

同

夜くれよりかひなく人はとなくゝる北浦乃かとし立名と

少納言平行豊

秋ちやうんためかるてよたなりゆくはたるのかゝる北浦路のかゝる

同

世の中さはちやなき俤もいつくかゝる森乃杜ゝ夕涼みして

左近衛権中将藤原雅豊

夕立乃なこりも見ゑす涼しさや森乃杜の下枝乃下露

同

引来乃露へと志るしとかりきくも月はさよ更けれはまこそされて

大膳大夫菅原長義

あつき日も暮てまはし立なりとも篠田乃杜の木陰涼しさ

同

いつくせんとなるよりかゝるにれうしみても
ないれひかゝる人のところと

天和三年六月朔日

住吉社御法楽五十首和歌

早春　御製

あるかなきも霞そめけり住吉や神代の松の春の日かけに

竹鶯　公規　今出川

折しるもみえぬ竹の葉しめてなかなかもいつの鶯の声

江上霞　通誠　中院

まさきはれ江や霞もみえぬかは海のみとりは松風の吹しく浦かな

宮中梅　家量　難波

匂ふとハたれもおもしらし婦る雪かさねのひかり雲の梅のえ

岸柳　実業　清水谷

佐保姫乃おりし手染も春ふかみ所かさして岸乃青柳かな

春夕月　実富　山本前宰相

山ふかハ霞の中空すきりいさよふ夕月乃かけ

帰雁　英通　梅渓

行かへるかりこそ花をよそに見て帰るハかりや春のなこり

初花　基量　東園

まちえて世のたれもえてさきそむるこれ一本乃花の嬉しさ

花盛路　隆平　鷲尾

浅からぬ花のにほひのたちそひて山路ハ見ゆるたれ乃白雲

雲雀　伴季　今出川

夕霞あれともあかぬ春霞立まよふ中にひとりきく声

新樹　経慶　勧修寺

夏きてハみとりの林の葉かさなりこたかく見ゆるみねの松

郭公　豊長　高辻

岸の上の杉の梢にほとゝきすなきてすきぬる声のさやけさ

寄橋　資蔵　日野

うつせみのしたはな川の橋乃上のかゝる風のたよりを

夏草　幸仁親王　有栖川

名もしらぬ花もましれは夏草のしけみにまよふ野への夕露

夏月涼　射城　西洞院

住乃江や夏ともしらてつきそれ浦なみに清き岸のなるかな

野夕立　兼連　吉田

ちる露にもゆる日影もはるさきて夕立すくる野への行末

水辺螢　熙房　清閑寺

吹風も涼しさそへてこくれの蛍みたるゝ庭のやり水

七夕　冬経　一条

契りをきし秋ハつきせし神代より年に一夜のちきり今はた

閑荻　定淳　今城

秋そとけさきこえける荻はらにあしよりの風そ身にしむ

薄露　具統　岩倉

夕の露もくれしてふける秋の露みたれておきそふ花のしら露

秋田　雅元　白川

穂になる田面の秋のこゝろいなく

秋夜寝覚　俊廣　小川坊城

長の夜の枕とひよる山しのあらしとはまとのうちやはそし

月前秋　新院御製

大空の清とてうつして古しへも今もこの月秋の光なり

瀧月　　方長　基綱等

山高み岩根をぬらす白月といふも瀧の白糸

擣衣　　為経　上野泉

いさやも衣うつ川の嵐吹那山の星の霜をさえて

菓火鼓　　雅為　白川

花の露つゆるにておれ枝も包ひの劍ハなくれおもかや

黄葉　　為箴　存会

先つしか射翁もまさてけるは露く冬津に岸は紅葉し

初冬　　淳房　万里小路

冬来ぬとまつゆふかけに冬くれけさ時の間に見えし行末の松

射翁　　通綱　中院

もとより松のみどりを深みくおほしめは末を流す射翁かな

冬夜　　隆豊　七条

冬の夜とつひにて寒や行よし松岸根の露も結ひむすぶらん

氷初結　　雅豊　飛鳥井

今朝鳴の岩間に結ひもありしハうつまさひくかるうちに氷りけり

冬月　　季保　梅園

契河の月影冬の氷にみちしや松の風の声もさむけし

積雪　　以資　日野

世の中のその花さへうきまきれ行あひ行きさ雪の中にちも見

鷺持　　宗旅　杉本

かりと云て来たもよかりし中宿の窓ぬる梅の鷺や見てまちかへて

宗月亭　　頼寿　柴宝

待しかひ月はのほりても又よそに見ゆるなかの世の中見えしなかれ

ゝ雲ゝ　　公起　押小路

うき雲のおもしろさを見せ紫雲也月はのとかにさえのほりて

ゝ山ゝ　　時量　平松

あひおもふ人しあらはかよひちもみやは逢坂の関

ゝ川ゝ　　資廣　柳原

逢瀬ありと思ひしを縁し山川のあさきも深く流れと沈くそらん

ゝ門ゝ　　持言　山科

いつくよりしのひかへしも杉の門たていく度とあかしくらしつ

ゝ床ゝ　　兼熙　鷹司

たちかへりきてまつともなひなくよひの夢はかなくもしきたる床

ゝ菓ゝ　　行豊　石井

うちとけていりし姫小松のもとならは千代の恨もしらぬ姫

ゝ木ゝ　　実陳　川鰭

枝かはと繁りもふかれしや色ふかきまの梢にさきほこる根かけしからも

ゝ車ゝ　　実陰　武者小路

くるまよせ思ひわかれて車の引つなれぬるけさはなからまり

〻鏡之　実種

契りおきてともにかはせんうき人のくもりしなれし身をも移してかゝみハ

暁寐覚　氏信　水無瀬

ともね江の松のとかそのねさめのゆくへもわかしてよそろ浦浪

山家　重條　庭田

山かつの世のうきよしかくれかくてよそ人もかしなのくこゝろうらん

浦舟　光雄　烏丸

浦風や袖に涼しき船をよるわさこれかくの玉もかりのうき寐

旅行　実輔　西園寺

みちのくのさ世々逢坂の山こえてうき旅寝の眼目ともやすらん

述懐　基福　園

老ぬとりしもかことはに敷島の神の神かけて身をもいとはれて

家居祝　基迪　石濱

あふくそよちよろせとして敷島の松の千世のはをみちれはぬとめへき

物題

奉行　烏丸大納言光雄

同日

玉津嶋御法楽五十首和歌

海邊霞　御製

玉津嶋入江の霞うちなひきさかえたる和哥の浦の春

氷解　方長　甘露寺

打とけし氷もとをくうちよする池の浪の花のさかるこの春

若菜　時量　平松

こゑ人のけふの子日につみそめしよはひ草の種ハつきせし

梅　兼熙　鷹司

夕まくれ霞のうちにおほつかなる色ハやよひの梅のちる風

柳　定経　作嫩

浅みとりそめてくるてふ春柳のいともよりかけみたれし春風

早蕨　氏信　千代頼

雪とけし峯のうへにも萌出てかすむ折もうつる野辺の早蕨

関春月　意光　蓑松

関乃名の霞にこもるくもりなきはかなくて月の影とそめよ

待花　通茂　中院

いつかれやさくて来の初も春風に匂ひわたりて花のたよりハ

惜花　新院御製

玉津嶋うらとし入江の春ハいつもおし花ハ明ぬ家

弱残花　実輔　西園寺

散残る花もやあると岩根ふみ行山路のおくも尋ん

雉　通福　愛宕

手まくらの野のこゝろしらぬ春くれて行のゝはらに雉やなくらん

松夜　隆慶　櫛笥

みとりなる松のこゝろも思ひとる春の夜なかもこよひともしらぬ夜なかそ

更衣　基福　園

夏きぬとけふぬきかへし涼しさに玉はゝきてこそ霞の衣ぬきかへしつゝ

卯花　有維　千種

よしくまもへて袖の香や垣根つゝきにちらぬ卯の花

郭公頻　定誠　花山院

夏のよハまたよひなからなく声のかゝる月ハかくしもなくにそ

橘　通躬　久我

吹きそふる風も袖にハ匂ふなり花ちる里の軒の涼しさ

菖蒲　俊廣　小川坊城

引けや今日入江のあやめかのしのはし根のなかきあまの浦人

早苗　雅庸　竹

六月のかけも日をかれてとる人のそなへる涼しさ

夏月涼　康綱　堀川

蓮もやハまた川たにこのつゆとまる袖に涼しくやとる月影

早涼至　基熈　鷹

二ほひける朝の風ハ蓮に吹く露もおくさも秋の涼しさ

織女別　淳房　万里小路

またも世に逢ふ天の河わたりても蓮のとまりハよそに絶し

蓮　光雄　鷹丸

花はちる今も池の蓮の玉とはしきてなくしく

蟬夕風　為綱　上冷泉

吹しきる木の葉の蟬の夕かせさやかなるこの浦の蟬

葉虫　儀光　三室戸

又の来はまつ此の宿とかくては思もかとすな庭の草村

鹿　俊方　小河坊城

秋萩の咲れもあかてたとしの津れ/\なる業と恨くやかく

山月　弘資　日野

玉津島ところかへてや海こしは山のも清くみこつて見る

池月　時成　西洞院

風にのみ波かへりて霧はらふ月ハ雲井も花しられて

冬月　経慶　勧修寺

よな/\は月とこそれてみかれしをかりしとこそ見けるは河水

鴫　季保　梅園

もろともに門田の稲のかれくさにかくや八千たひ鴫はなくらむ

霧　通音　久世

玉津島吹かる風に雲きえれて入日はなれてかくの夕霧

河紅葉　宗量　難波

龍田川こゝろをそめて紅葉の色みえて多はしる人しるよし岩浪

木枯　幸仁　有栖川

吹ちりてはしるこゝろハ人のひと葉はそむ木枯の風

橋上霜　資茂　日野

霜おくとも木枯はもみちとつもる宿のさ橋

寒草　実久　正親町三条

鶴目新にてこくえてく村くて霜やまならさし庭乃名草

池為有　実通　惟法師

こゝろあらハ石ふかくなるとも池の汀はちりくとし鴨かな

宣也　雅喬　白川

津もてる水の色を映花の江の蓬も落花の香そへてとかん

鶴将　附方　平松

さて林高のまちかくこそ海まさく山の雪くまこそ鶴林すへう

堤出　実業

堤出てうへかる底くて雪をみくてゝ林きも流く出てるとこ

言如道　公視　今出川

いさそめく名は林にて行るしの葉とたてあさきそれをかひとやとく

築道　為條　庭田

前もまさ林のあ世かての葉築てとてこ林しの葉乃末ハつそ海の

為遠茂道　定淳　今城

侍れのこゝろそ津しけ花香てつえし茂ハあしゝてさしむる梅有

後鶴道　兼豊　為家

あひみしハまさし花茂林かそうにれしやおやそしとる八うて薄て

那道　幽房

つゝき乗しかひも今ハかひにそみきせくにてハれしし袖乃涙く

昭道　為基　醍醐中納言

よそもれ姫はしつかさ姫あまた夜をこめてはるやたゝしきるへき

山館竹　隆豊　七条

打むれてうへしつきねくてふしのみに揺ふ山かけれの竹は下庵

行路市　公晴　花園

志る声の姫行きかふ人も月の市ゝ驚れしふしく声さへ之

旅　実陳　河鰭

あけほのも志らすつゆしけくて旅衣かさねし様ふ風

望遠帆　有純　千種

追風に吹おくられて行月の浦の流乃千重ふしふ帆さへ見

塩屋煙　実種　風早

浦路ゝかたさへ姫ふしあはれ夕けむりたつ煙は

祝　冬経　一条

万代ゝ祝ふ御代あふしき津浦

幾のこし葉はみちのかすへは

勅題

奉行

日野中納言資枝

天和四年正月九日

禁裏和歌御會始

家〻翫春

御製

匂ひてハいつれもしれぬ花鳥も我家〻の春やたれかしむ

関白冬経

住馴しみたつのさいやしき宿毎にしのへていそふ春の代の春

左大臣基煕

峯の雪もけふはふきはらひて切ても嬉しき春をうつしとくなり

右大臣兼熈

家の風ふきつたへてもなほつきせぬ世々の道をいはふかし

式部卿幸仁親王

やしなひもよきをもとめしへてそのまゝを道とおもひていそかなるらし

前内大臣經光

宿あまた道をおもひて我道といはゝ萬代まて世をつきなまし

権大納言經慶

たかしやも御代ゆたかなる西氏の光もゆくすゑを道とおもひて

中納言実通

家の風ふきつたへし我道は恵ある御代にさかゆるひかりと

權大納言藤原光雄

猶家の道もろともに吹物の光常にあはれにありぬへし

権大納言方長

あめのしたおさまる世にも家の道恵ある世はなほとおもひくく

権大納言資廉

たつ宿もまちえくあつむ道の名をとなへてしまれは花そさくらん 説

参議実家卿

ゆきかよふやまとことはし家の道もさかゆる御代の道とおもひて

正二位基福

梅とかさし庭をとひくたつの宿もさかゆる世は道やあらはし

正二位俊廣

もとの道まもりよはやしきへて世の道はとこしなへにつたへてや

正三位澄房

星つゝの晩花らくひもくたつ山もかすかなれとも春やたちぬらむ

正二位通成

花鳥ハまたしらぬ野の雪まわけても春をしるハ子日とやいはむ

権中納言家量

宿毎にいさなふ友や梅かさき春風さそへとくるのにちらん

権中納言資蔵

君か代の春ハいつより家にこのみもさくも雲井の春にしるへとも

権中納言通純

もゝしきや花よりさきに中たつ梅か香あるれひのうちきり

権中納言公通

君の代につくのさかへん和御の中室もかのいかにてくこう

春宮権亮実基

君か代ハ神もまた春の中にこれいくちよ末はるか種も津のはらし

権中納言家親

みな人の中にたくひのうらし我君か千年の春をいはふなる千代の葉

正二位平時量

宿てとまれく花ハもとよりみよしのにこゝろいかにしられぬのミ春柳

従二位友家氏信

宿毎にまたしら人わかちみて春をしらはみたちのかけや木の竹林声

従二位定淳

たかしもやるかにいやしき家ゝくらんをゆきとひらへく

式部大輔菅原豊長

治まれる御代乃春風おとせぬハ家ことに匂ふ花さかりしき

大納言隆豊

春のひのひかりそのハれ民の戸のにきはふ春にほふやたちはな

大納言季保

あふくそよ影をかさねて春は日のひかりそへたる御代乃恵を

参議左近衛権少将基量

色は梅庭の青柳にしやくれも人乃春やつけて見

三木左近衛権中将実業

たゝやすみなくて

こゝろもとめのみちらくまこしあかきえぬかみ春ハのとけし

三木左近衛権中将実條

ゆたかなる御代の春の花鳥はなの色をまてうつる人のこころをそ

三木隆真

宿もせの春やたちしひ梅乃花柳乃糸のあやの錦かな

従二位藤原実陳

世ハ春乃人の花をまちそハれく雲とをらく鶯乃こゑ

従二位藤原実種

たか里も梅かゝゆかしかほりある人まちかほもてなしそ遊

正三位源有維

ゆたかくらしに民の戸も春ものとかに海しつか世は

正三位源通輔
これもけふ宿をたちならひともなへて逢ふことある世の春は君と

正三位藤原実家
宿ことの春はあらそひとつゆひて小松小松はかくへと

正三位源雅高
梅かおり鶯さそふ宿ことにあまねき春は光とやとふ

従二位藤原言光
中ことの春をうつし小松川ひとつのみつもいとゝこころは

従二位源通音
宿毎にひきそへていはふ春もかはらぬ花の都まつりてなる

従三位藤原為豊
狛見るや大宮人の中ころしてしめの春の花のはつ音を

大蔵卿清原宣幸
宿ことに霞たなひく民もゆたかなる世の春いはふらし

従二位藤原隆慶
君か代の千年は春をゆたかにていはふて業は種ハ洋させし

従三位源英通
門ことに松をたてゝ民は皆もゆたかなる春てなるを世ゝをさ

従三位源惟庸
たかやまの松も千世かへて花の色はみな春なかりて春は世ゝをさ

花鳥のほかにも春はありかとて しるし宿には千代の花もさく

藤原臣左近衛権中将篤親

門ことに世のみちひろく松たてゝ おもひいるへき春ちきりなし

藤原臣右大弁光定

松たつるときはかけつゝ松たてゝ こしあるき世へて来ぬ代の春

左近衛権中将藤原兼豊

万代の春をやちきるみかきの門 とかへてたてる小松かな

左兵衛佐藤原貞従

これもみな松そ立へく宿ことに 来る千年の春ちきるらし

左近衛権中将藤原為義

左近衛権中将定淳

花鳥もまたかれくやかはらぬかたの宿と梅柳世の春をまつらん

内藤臣右京将言

来る代の春はものへとれる宿もあまたしくはいはふ徒

左近衛権佐藤原経光

たの宿もあまたしくの梅柳かの色もかはらぬ春をまちえて

中宮亮藤原共方

世をたのむ春は花もてと家毎に竹えてかはらぬもてなし

左近衛権中将豊忠

門ことに葉そへの松をたてゝえ千年の春をいはふもろ人

侍従卜部兼連
世ハ春れひのひかりとおもへて光治のとくにかよふ人の家々
少納言平附方
いつの春かの年は春くる家々の戸のはつかとゝいにもゆる人
少納言平行豊
これもまた治めて春の織分業あまねくはやくのよの業
左近衛権中将源雅永
世にたえしかの春ハたゞかくれんとおもへくゝ世ちよかん
左近衛権佐藤原康保
春の代の春は豊とゆたかなる世にて花は同じことく

神祇伯雅之
あつことのかんだかく鶯も梅にこえてたのしむこゝろの聲も春の光と
民部権大輔永福
もろ人もともはしくして花鳥はたのしむ心の聡たのしむやすらけし
左近衛権中将雅豊
花毎にかゝる聡春はしのふやゝ年はつもとちとせなる門松
左近衛権中将隆盈
めくみある春とむへてよ世にしまゝ民ものとまても見てくはらし
左近衛権中将実久
春ともいく家居ふへて門出入のたえさる賑はしき春

式部権大輔平忠継

宿ちかくきつつなく年をちきりてやちりてもちらぬ花の香そする

右近衛権中将藤原公晴

君か宿かはらぬ色にかはらしな花をかさしのちよの春まて

右近衛権中将藤原為継

花の宿とはむかしのかすみにはたちかへりても宿もにほひきたよしきこゆ

大宮権佐藤原光忠

津の国のなにはの春の花の宿は梅も桜もさかりなりけり

右近衛権中将藤原実綂

春は風さそはぬ宿をたつねしも世は花の宿にいにしへをふる

蔵人左中弁俊方

花の色はむかしにかへる宿なれや幾千代のにほひの春はかはらし

右京権大夫藤原忠久

宿ちかく春の色にはにほひきてさくらの花のかけやまかする

右近衛権少将藤原基淳

治まれる御代のめくみにたえせぬもみかきの花の春をかさらし

中宮権大進平時香

宿ちかくみちくる世々に花のかけの春にもそふ花のえたの色

侍従藤原為藤

いそのかみふるき都の花の色も春にいかてかさかりをそへむ

左近権少将藤原家尚

たのしひやきみかいやしき宿毎に君の千年松とひらくへし

侍従源光衡

宿ことに子日は松をひくへくそ是も千年はまついたまわし

左衛権佐藤原輝長

家ことに人の春しる花の名は多喜の御代の代のしるし

中宮大進藤原弘昌

君か御代紀の氏は中に松之かへ千世あらそふらし

侍従藤原基信

宿毎に君をはしめて松竹の葉のしけるかな千代のためし

侍従藤原具統

いくかへり年をはしめて中にこの人とはみな春のたのしき

読師　勧修寺大納言

講師　清閑寺頭辨

発声　庭田宰相中将

題者　飛鳥井中将

奉行　烏丸大納言

天和四年正月十七日

新院御所和歌御會始

東風暖入簾

御製

花鳥のよそにかをりて玉たれにすきくる風も春としりて

貞九

世ハ春とさく梅が香を吹入て簾のうちの風もかしけき

基熈

春きぬれや朝日さし入玉垂のこの軒風ハ吹もかはらし

梅かゝをさそひくる夜の玉簾まきあけ風ハ春をしらせけし

幸仁親王

いとゝやも花は香さそへことしはしらて吹いる春は初風

経慶

玉たれの小簾のつるゝやに入風ハ春はきしのみぞくるきさ

光雄

玉たれの窓の袖にも吹入て氷をとかす夜はのけさ

家熙

まきあくる袖にもさそひし梅の香をことしは春風

通茂

小簾はらふのとかなる梅の香をとめて吹入梅の花は春風

資茂

みちかきやよはの春風やまつまつ春の光も花の匂ひも

時量

吹入も袖にとゝむる春風に小簾はらふあさの梅の香

定淳

新玉の柳かつらく玉たれのこすはつきある春の初風

隆豊

はや春にたちかへりけり玉たれの小簾はひらくに入風も春へけく

実種

実富
うらかとひ緒簾の外に吹入も袖にしらるゝ春の初風

雅喬
いつる日はひかりとゝへて玉簾隔まる風も春をしりける

言光
にほひきて梅のかをりや玉たれの緒簾の隔つる風を先宿き

保春
さしてはうつる日影も吹風もとり入ことはおもしろきさ

隆慶
ゆく梅の花の香かをりて吹入てかへしもて自にみとも知る春風

資兄
さかれや音もしらてゆひきて梅の香自に小簾の追風

定縁
玉たれの外よりも入風も今またこそやはる山の春をしるらし

宣勝
さゝては緒簾もしく袖に吹風の香もしらて自に梅の香

時方
世ハ春は風やゝかに吹かよひこゝしてはしらから鳥もなれきて

行豊
朝日影みちしるきもの玉たれの隔もしかし入風はのとけき

雅豊

朝日出てこほりもとけゝき鶯は谷の戸出しの初春の初風

長義

春の日もひかりやみこのくれ乃鶯吹いづる風ものどけき

天和四年二月廿二日

水無瀬宮御法楽二十首和歌

餘寒風　御製

春はなをはしめてもろこしお松乃戸にとも年は嵐の音はさむく　詮光

梅欲綻　公規

春風もふかしてあけゆかはやほころひそむる庭は梅かえ

友に柳　実量

人とはゞ我世の春と友に見よ誰ゆへとなし青柳の糸

岩早蕨　　兼豊

ましるなる岩間の松の下蕨折もたえぬ世々春は来にけり

岩春雨　　兼也

津くしかりくしゝ野の春雨に青くもまされ宮川の水

遠路花　　実輔

かのこにもれぬなくもみよし野ゝ山路は花へとくは鶯

花間鶯　　淳房

春ことにむかしも津きせぬ咲はこゝにて梢は花の色にとまりて

春日遅　　保季

暮れくとくれしいひ野の春は日も花咲なくハ人めなしまし

雉思子　　雅喬

あすかゝて子をおもふやみの夜のまた来合雉子は立出て鳴

路苗代　　通茂

江のまやむかしもかく苗代乃みつをいそく小田は細道

家霞述　　修方

かつ絶ゆる中もひもや八年しはもとに見ける霞の色らん

こ纏こ　　雅豊

もしほやく浦の纏れたつひとむくゆるなかひの身をとこうくらん

こ鶯こ　　基熈

志ある声よし笹かくれ鶯の鳴きて猶いつかれし被かつせん

寄夕恋　為綱

あはれさはや契りもせしとその後夕暮ことにまちもしられんかたはゝ

之乗之　為長

きゝなる夏かうつゝおもひねの雲は枕を通ふ小夜ころも

松歴年　幸仁

契りまへときてやゝ世とへ経るあかなんしも昔にかはらぬ岩かねの松

鶴立洲　光雄

吹風も寒く声川せき河なかれたてるもさよや露は毛衣

野村笛　資茂

夕暮とや笛は声ちつゝ吹たて我ともに村くかへる総角

雑述懐　俊慶

思ひやれ未た法のみちしるへとも声して契る身はなにとよるな

社頭祝　氏信

神なくて千はからん嫁る神しのき
この御代いつまてかんきかれく

講師　昭辨

出題　為綱朝臣

奉行　烏丸大納言

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan